

# 鉄鋼新経営

## 描き挑む成長のビジョン

ーインバー合金 ター関連への積極投資 G(液化天然ガス)関  
(低熱膨張合金)の製造 を背景として、今期だ 連や、CO<sub>2</sub>の地下貯  
品を取り巻く環境か けでなく来期も旺盛な 留関連でニーズがあ  
ら。 受注を見込んでいる。 り、日本製鉄のハイエ

「ありがたいことに FPD(有機EL)製 ンド品向けで引き合い  
半導体製造装置関連向 造装置関連向けは堅調 が増える」と期待してい  
けは、AI(人工知 能)関連やデータセン イプ用穿孔工具はLN ー 現行の中期目標



成瀬 正氏

## 新報国マテリアル社長

の進捗状況は。

「インバー合金グロ ーバルニッチトップでさらなる成長へ」をスローガ

に掲げ、6年間総額で 20億円の設備投資を計画 し、創業80周年にあたる 2029年12月期決算で 売上高100億円、経常 利益15億円、ROE(自 己資本利益率)15%、P B R(株価純資産倍率)

の進捗状況は。 —その研究開発の状 況を。 「インバー最先端技術 の確立を進めている。当 社研究スタッフは全社員 の10%を占め、研究開発 費は10年前に比べて3倍 が増やし、次の世代で花 が咲く材料開発の種まき を行っている。例えばC FRP(炭素繊維強化フ

社研究開発部門に導入し た高精度磁気測定装置を 用いて、インバー機構の 解明に注力し、インバー 合金の強磁性と低熱膨張 の相関を明らかにした。 現在は新たに強磁性によ らないインバー合金の開 発にチャレンジしてお 素材研究センター副セン ター長である柳谷彰彦氏 を顧問に招くなど、イン バー合金に特化して積層

# インバー研究の最先端へ

1倍以上、年間90円配当 を目標に掲げる。24年1 ー9月期決算は前年同期 比で減収減益となったも の、通期は増収増益を 見込んでいる。株主から 支持される会社を目指し ており、24年12月末で株 式を2分割し、流動性を 高めることで新しい株主 を増やす。5年先、10年 先を見据えた研究開発、 ものづくりを着実に進め

ー近年で力を入れて いる3D積層造形分野に ついてはどうか。 「この12月、本社研究 開発部門に米国オプトメ ック社のPDED(粉末 末指向性エネルギー堆 積)方式の3D造形設備 を1台新設し、25年2月 から本格稼働を開始す る。また25年3月稼働を 視野に、三重工場内に米 国製のLWAM(レ

造形技術の研究開発を推 進してきた。24年11月 に は兵庫県立大学が産学連 携で金属材料研究などに 取り組む『ひょうごメタ ルベルトコンソーシア ム』や東金属産業など数 社と共同で、ドイツで開 催された世界最大級の3 Dプリンター展『FOR MNEXT2024』に 初出展し、国内外でアピ ールを強めている。スタ

## 新設備で実用化加速、水素に照準

イルの異なる設備を導入 することで、独自のイン バー合金との相性、造形 後の製品品質などを確認 し、需要家へのサンプル 提供を通じて実用性評価 などを進める。同時にL WAM方式で用いるワ イヤ素材の開発も推進す る。設備を新設すること で、より実用化に近い開 発に着手する。需要家へ のサンプル提供は半導体 製造装置向けが主体なが ら、航空宇宙分野などに も広がっている。さまざま な方式の積層造形技術 で自らが製品を手掛ける ことで、当社の技術・ノ ウハウを駆使してシース を生み出す一方で、需要 家ニーズの捕捉につなげ ていきたい。

ー水素分野への取り 組みを。 「液体水素分野へのイ ンバー合金採用に照準を 合わせている。カーボン ニューラル社会を実現 するためには水素の活用 が必須条件であり、液体 水素の製造・輸送や貯蔵

インフラには液体水素温 度マイナス253度の極 低温まで低熱膨張である インバー合金が採用され る可能性が高い。このほ ど産官学の技術交流を開 始しており、水素社会の 実現に向けて研究を進め ていく」

ー三重工場の方針 は。 「铸造品の品質向上に 力を注いでいる。鑄型で 固めた鑄造品について、 仕上げ加工後に傷や穴な どが発生した場合、これ までTIG溶接で補修し ていたが、導入したレ ーザ溶接機を用いること で品質が高まる。大阪大 学における接合分野の専 門家の方々の指導によっ て溶接補修技術に磨きを かけている。また、近年 は夏季に酷暑が続いてお り、労働環境改善の一環 として、暑さ対策を検討 する。新たな独自インバ ー合金の開発を目的とす る真空溶解炉の新設も考 えていきたい」

(濱坂 浩司)